

奈良県立医科大学 学報

2002
AUG

vol.2



あいさつされる Piya Netrawiien Dean

CONTENTS

チェンマイ大学 医学部長らが来学	表紙
ホオジロ通信 (吉田学長)	2
看護学科設置に係る中間報告	3
研究紹介	4-5
就任挨拶 (上森事務局長)	6
教職員倫理の向上に向けて	6
平成13年度特別会計決算報告	7
平成13年度における経営改善の進捗状況	7
病院運営協議会報告	8-9
一日看護学習体験実施	10
平成14年度奨励会事業計画	11
教授会報告・学術研究助成決定・医師会学術奨励賞受賞者決定	12

チェンマイ大学 医学部長らが来学

チェンマイ大学との学術交流協定は1996年(平成8年)8月1日に「医学研究、医学教育及び医療の発展、向上を目指すために学術交流を促進する」ことを目的として締結され、毎年、学術交流のため研究者や医学生の交換等を実施しているところです。

本協定は、3年ごとに内容を再検討し変更又は廃止することとされており、本年が2回目の更新時期となり、両校の間で事前に協議した結果、交換する研究者や医学生の受入内容の変更や双方の研究者リストの交換等所要の変更を行うことにより更新することになりました。

協定書の交換は、去る5月13日に、チェンマイ大学医学部のPiya Netrawiien Dean(医学部長)以下9名の関係部長補佐が来学され、吉田学長や吉原学生部長等との間で行われました。

その後、本学から国際交流委員会委員等の参加を得て、意見交換等を実施しました。

ホオジロ通信

大学の個性

日本の大学は100年以上も前に始まりましたが、終戦を契機に大改革が行われました。これは必ずしも国民の総意によるものではなく、アメリカ総司令部の意思が大きく働いたことは否めません。それから50有余年経ちその結果はどうなったと解釈すべきでしょうか？

20世紀も終わりに近くなったところから、日本の大学はどれもこれも似たり寄ったりになってしまい、特徴のある大学が少なくなったという批判がしきりに聞かれるようになりました。言いかえると大学の個性が無くなったということでしょう。アメリカの大学は個性があります。何でもかんでもハーバードではありません。医学に限っても、たとえば移植医療のメッカはピッツバーグ大学で、だれもハーバードが一番とは言いません。一方、医学教育に関する限り、ハーバードのニューパスウェイはまたたく間に全世界に広がりました。イギリス、フランス、ドイツの大学もそれぞれに個性があります。

「学長は将来奈良県立医科大学をどのようにもって行くつもりですか？」との質問を時々受けます。これに対して「建物に例えると、ドーム球場のようなものでなくウィーンのシュテファン寺院やパリのノートルダム寺院にみられるように、天に向かって屹立する尖塔のあるゴシック建物に象徴されるような、個性のある、キラリと光るものがある、そしてそれは他の追従を許さない・・・そういった大学になってほしいと思っています」と答えることにしています。

昨年10月着任以来、大学および看護短期大学部の全ての教授、助教授、講師それから何人かの助手の皆さんと個別に面談いたしました。教員だけではなく、病院のコメディカルの方々や学生諸君の何人かとも会い、ゆっくり話をさせてもらいました。みなさんお忙しいので、できるだけ30分以内にしようと努めました。どうしても超過してしまい2時間近くになったこともありました。今まで160名以上になりますが、この経験は私にとって大変貴重なものとなりました。本学をよりよく知るのに役立ち、また本学の持つ頼もしい実力と大きな可能性を実感することが出来ました。本当に勇気づけられました。必ずや他の追従を許さない、素晴らしい個性のある大学になれると思いました。

個性を発揮するのは研究だけとは限りません。診療においては言うまでもありませんが、医学教育においても発揮できます。大きな希望を持ち、目を輝かせて入学してきた若人たちの意欲が萎えることのないように、6年間統合された一貫性のあるカリキュラムにより、良医を育て、優れた医学研究者を育てるための奈良医大方式と呼ばれるような、アメリカ直輸入ではない教育方式を編み出し実践することも、キラリと光る本学の個性となります。

現在本学は大学院重点化（これは大学院改革の第一歩です）、看護短期大学部の4年制化、医学教育の改善、病院の経営改善などいろいろな改革を進めておりますが、一方国の施策としての、大学や病院の独立行政法人化、卒後臨床研修の必修化、包括医療の実施など社会の大きな変化に対応する必要もあります。これらは時流に阿るものでは決してありませんが、新しい時代の潮流に鈍感なものは取り残されるといっても過言ではないことをわれわれは認識すべきでしょう。

いまわれわれに必要な言葉は「Be positive! 前向きに、建設的に考え行動しよう！」であると思います。

【ホオジロ通信のいわれ】

ホオジロの鳴き声は「イッピツケイジョウツカマツリソウロウ（一筆啓上仕り候）」と聞こえるといわれます。本学教職員および関係者の皆様に一筆啓上仕るという意味で、この欄をホオジロ通信と名付けました。



ホオジロ



学長 吉田 修

看護学科設置に係る中間報告

看護学科設置準備委員会は6月27日に第2回の委員会を開催し、3部会（総務、教務、入試部会）で検討を行った具体案を取りまとめ、「中間報告」として、7月開催の大学及び看護短期大学部の教授会に報告しました。

なお、報告内容は現時点においては中間報告であり、今後さらに設置準備委員会において、検討を行うこととしております。

また、7月23日開催の大学の臨時教授会において、看護学科教員選考委員会委員が次のとおり選任されました。

吉田学長、森川教授（産婦人科学）、豊田教授（哲学）、喜多教授（細菌学）、車谷教授（衛生学）、榊教授（外科学第二）、吉岡教授（小児科学）、岸本教授（精神医学）、中村教授（総合医療・病態検査学）

☆中間報告の概要

1. 教員の組織・体制

組 織	学科目制
体 制	教授は 8名体制（助教授、講師、助手は詳細なカリキュラム検討後協議）

2. 専任教員の確保

選考の方法	・ 8名の教授から選考を実施する ・ 教授は公募方式等による
教授の選考領域	・ 看護学の基礎分野の「病態医学」 ・ 看護学の専門分野の「基礎看護学」「成人看護学」「老年看護学」「精神看護学」「小児看護学」「地域看護学」「助産学」
選考(資格)基準	大学設置基準の資格を適用する
看護学科教員選考委員会	一つの選考委員会で8領域の教授及びその他の教員候補者を選考する

3. 大学の組織及び管理運営体制

看護学科設置準備委員会で主として教授会の開催方法について検討を行ってきたが、今後は大学の組織等を含めて検討を行う。

4. カリキュラムの編成

カリキュラムは、「設置に係る基本方針」のなかの基本理念を基に策定した教育目標と、保健師助産師看護師養成所指定規則を基に素案を作成する。

今後は、本学の特色、卒後の資格取得のあり方等について再検討を行い、カリキュラムの実施案を作成する。

5. 入学試験方法

一般入学試験	・ 初年度は現在の短大と同じ方法による試験を実施 ・ 次年度以降は大学入試センター試験を採用する予定
推薦入学試験	県内の高等学校卒業生を対象とした推薦入試のほか、社会人特別選抜枠も採用
3年次編入学試験	看護短大及び看護専門学校卒業生を対象として実施（平成18年度以降）

7月25日 学内外に、8領域の教授候補者の推薦を依頼しました。

◎ 締め切り期限 平成14年8月30日（金）

◎ お問い合わせ先 総務課 看護学科設置準備担当 松丸、西村
人事給与係 田中(秀)

人工神経による四肢末梢神経治療の超早期成績

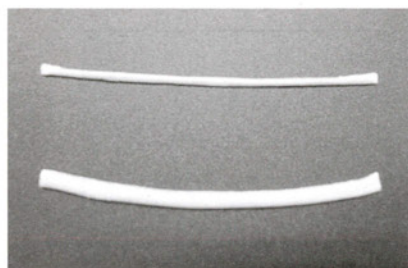
奈良県立医科大学救急医学 講師 稲田有史

おそらく誰も信じていただけないでしょう。

数年来の正中神経麻痺例の男性例、術前示指深指屈筋腱、長母指屈筋腱の筋力MMT 1、発汗なく、著名な寒冷時疼痛があり、EMGでも正中神経の測定不可能、Thermographyでも正中神経領域に低温域、Laser doppler flowmeterでも著明な低血流状態を示した患者に対して手術を施行した時のことです。みるも無惨に分断された神経の欠損部は8cmにおよびました。人工神経を移植した手術直後、おどろいたことにMMT 1であった母指、示指が動き出したのです。術後14日目には、ニンヒドリンテストで、正中神経領域に明瞭な発汗が確認され、21日目には筋力は増大、MMT3-4に達し、Laser doppler flowmeterでもはっきりと示指固有知覚領野の血流量の増加を確認できました。患者のTinel 徴候はすでに、21日目にして、23cmにまでのびています。同時に施行したエコーでは、人工神経内に再生したと思われる構造物を確認できました。術後筋電図で、この母指筋力の突然の回復は尺骨神経との交通枝を介した電気刺激が生じた可能性があるかとわかりましたが、損傷された神経が健常神経になんらかの抑制をかけていた可能性が考えられます。これらの結果を受けて、われわれは長期術後再建例の実験系から超早期手術例の実験的研究に入っています。ヒト知覚神経再建例では、これまで治療が困難であった寒冷時疼痛を改善させたことを統計的に初めて証明できたことを皮切りに、さまざまな興味深い事象が確認されてきております。



筆者(左)と清水教授(右)



人工神経(実物は2mm)

本学医の倫理委員会(平成14年3月26日)にて、受理承認された人工神経は、京都大学再生医学研究所清水慶彦教授、中村達雄助教授らの研究グループが開発され、犬腓骨神経の8cm欠損に対する応用で、運動神経麻痺を回復させた人工神経として知られ、その臨床応用が待ち望まれていました。2年前に末梢神経再建についての臨床評価を依頼され、周到な評価を準備して本年4月から臨床応用を開始いたしております。臨床応用に合わせた量産体制にむけて、整備が進められています。すでに筆者の解剖学的検索の結果に基づく要望に応じ直径0.7mmから、13mmまでの人工

神経(神経軸索一本の部分損傷から坐骨神経本幹まで)を技術者の方に用意していただき形状も楕円形から、紡錘状まで幅広い試作品を揃えて緊急神経欠損から陳旧例にいたる末梢神経再建の臨床に対応するべく努力しております。人工神経の外周は、PGA(polyglycolic acid)の緻密なメッシュ構造で、内部にアテロコラーゲンのスポンジが充填されている極めてシンプルなものですが、この内部構造のコラーゲンスポンジこそが、この人工神経の秘密でもあり、特許申請された技術の賜であります。材料のすべてが、すでに厚生省から認可を受けた医療材料を加工したもので、安全例については十分な検討を繰り返し、問題がないと考えられます。実際にこれまでに臨床応用された35例にも異物反応は認められていません。評価には、理学所見に加えて関連施設でのLaser doppler flowmeter(Image flowmeter: スウェーデン製)による血流の絶対値測定を中心に、本学皮膚科講師の山科幸夫先生にThermographyによる評価を、電気生理学的検討をリハビリセンター神経内科森本茂先生を中心に、大学神経内科の各先生にお願いして、第三者として厳しい評価を加えていただいております。まさしく奈良医大の各教室の皆様の協力をいただき、臨床応用への対応と評価をお願いしているといえます。

患者さんの唯一の情報源は新聞メディアであるという開発者の清水教授のお考えにより、ながらく独自に取材を進めておられたマスコミの方々からの新聞報道により、早くも日本各地から患者さんの問い合わせが相次いでおりますが、四肢の再建のみならず、多種多様な要望が寄せられており、是非大学各教室の先生方の一層のご協力をお願いしたいと切に思っております。最後に、本研究に当たり、深いご理解とご支援をいただいております学長先生、病院長先生、整形外科高倉先生、救急科奥地先生をはじめ各教室の先生方に、この紙面をお借りして厚くお礼申し上げます。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

生物学教室

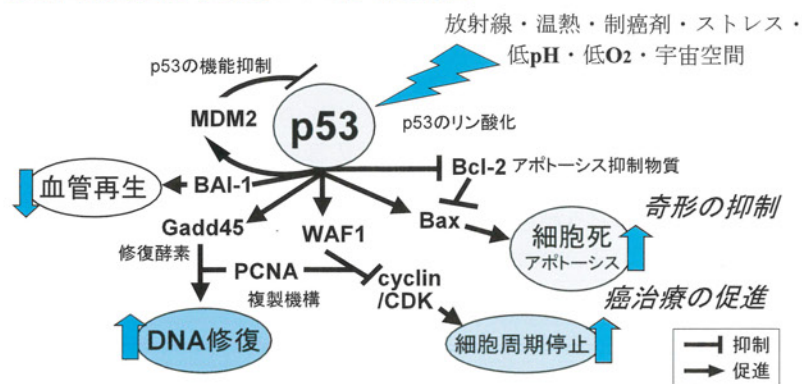
現在の生物学教室は大西武雄（教授）、大西健（助教授）、高橋昭久（講師）の3名体制で、分子環境生物学、癌治療、宇宙生物学の3つの大きなテーマについて研究を進めています。

- (1) 「分子環境生物学」という新分野を開拓中です。現在の地球上の全ての生物は様々な環境ストレス（放射線・紫外線・温度・化学物質など）に曝されながらも巧みに防護・適応して生命誕生以来生きながらえてきました。環境変化を受容する生体構成物質の同定と、受容した後どのようなしくみで応答していくのかを、分子・遺伝子レベルで明らかにしつつあります。例えば細胞や個体が予めの放射線・紫外線・温熱・化学物質に曝された後、次のより大きなストレスに耐性を示すことを見出しています。どのようなしくみで生物は環境変化を乗り切ってきたのであろうか。我々は環境ストレスに対する応答物質として癌抑制遺伝子産物p53やストレスタンパク質HSPなどを注目しています。
- (2) 癌は生存に必須な本来の機能を持っているタンパク質の複数に突然変異が生じて起こる分子病の一つです。患者がもつ癌遺伝子・癌抑制遺伝子の変異を検索して、治療効果予測と、治療法の選択の可能性をねらっています。放射線・温熱・制癌剤は変異型p53細胞にアポトーシスを誘導しにくいですが、正常型p53細胞には誘導しやすいと報告してきました。そこで、変異型p53癌細胞には新しい治療法である分子シャペロン治療によって変異型p53を正常型に変えて、p53欠失型細胞には正常型p53を導入する遺伝子治療で、より効率の高い治療効果をめざしています。患者それぞれにあったオーダーメイド医療へと発展させたいのです。治療行為後の癌細胞の死の様式（アポトーシスカネクロトーシスカ）をp53やHSPの働きを調べて、死につながる生命化学反応を点でなく線で結ぶシグナルトランスダクションとして研究しています。
- (3) 微小重力・宇宙放射線環境である宇宙での生物の適応、姿勢制御などの研究を行っています。太陽や銀河系からの種類・量とも多い放射線環境が宇宙です。地球は磁場やオゾン層や大気によって守られています。一般人は年間1 mSv以上の放射線に被曝してはならない（ICRP勧告）が、スペースシャトルの中では1日で1 mSvの放射線に被曝します。我々は宇宙飛行したラットの皮膚や筋肉にp53が蓄積することを発見しました。宇宙環境はヒトにどう影響を与えるのであろうか。人類が宇宙空間へ進出することが実現し、宇宙ステーションでの長期滞在や火星探検が計画されています。宇宙放射線の人体影響を調べ、クルーの健康のために放射線防御法を我々は研究しています。さらに、地球では生命が誕生した当時の大気環境が再現できないが、宇宙ステーションを利用すれば、生命誕生のドラマの研究が可能となります。また、オゾンが減少して紫外線が増加した時、地球のどの生物種が死滅するのか、どのDNA修復遺伝子を増強すれば生育できるのか、宇宙研究をすることで地球を救いたいと思っています。幾度もの宇宙生物学実験を行い、数多くの成果をあげてきました。

進歩した先端技術を分子環境生物学研究、癌研究、宇宙生命科学研究に積極的に取り入れ、しびれるような研究テーマに魅せられた学内外の多くの学生・院生や先生方と日夜活発な研究と討論に明け暮れています。

環境変化によるp53を中心としたシグナルトランスダクション誘導

癌抑制遺伝子産物p53の多機能性



突然変異の抑制

遺伝情報の安定

腫瘍の悪性化の抑制

環境への適応

環境変化が正常型のp53分子のリン酸化を導き、さまざまな連続した化学反応を誘導し、生物は環境に適応しようとする様子を示す。

就任挨拶



上森事務局長

平成14年6月7日付けで、就任いたしました。

医学・医療を取り巻く環境がめまぐるしく移り変わるなか、現在、本学においては、大学院改革、看護短大の4年制大学化、医学教育改革、附属病院の経営改善・C病棟の建築等々、様々な重要な課題に取り組んでおられるところであります。

皆様方のご支援と御協力のもと、これらの課題を克服し、医科大学発展のため全力を尽くす所存でありますのでよろしくお願い申し上げます。

教職員倫理の向上に向けて

綱紀粛正の文書は、あなたに対するメッセージです

本学においては、一連の不祥事を契機として、教職員一人ひとりが信頼の回復に全力をあげて取り組んでいるところです。本学に勤務する教職員は、医療人であるとともに公務員でもあります。再三の注意喚起にもかかわらず、県職員による不祥事、とりわけ、医療関係職場におけるわいせつ事件や酒気帯び運転による交通事故の発生は、我々の努力を踏みにじる結果となり、県民の信頼を回復するためには、今まで以上の真摯な取り組みの積み重ねが必要となります。

「セクハラ防止研修」の推進について

このたび、健康局においては、患者と接する医療関係職場においてわいせつ事件が発生したことを重大に受け止め、すべての職場での「セクハラ防止研修」の実施を決定し、さる7月12日、各職場での研修指導者を養成するための研修が、本学において開催されました。

本学からは、17の部署から28名の担当者が受講し、その後、各職場において職員研修を実施することとなっています。なお、教員については、一般、基礎、臨床それぞれの区分で研修を実施することとしています。



《セクハラひとくちメモ》

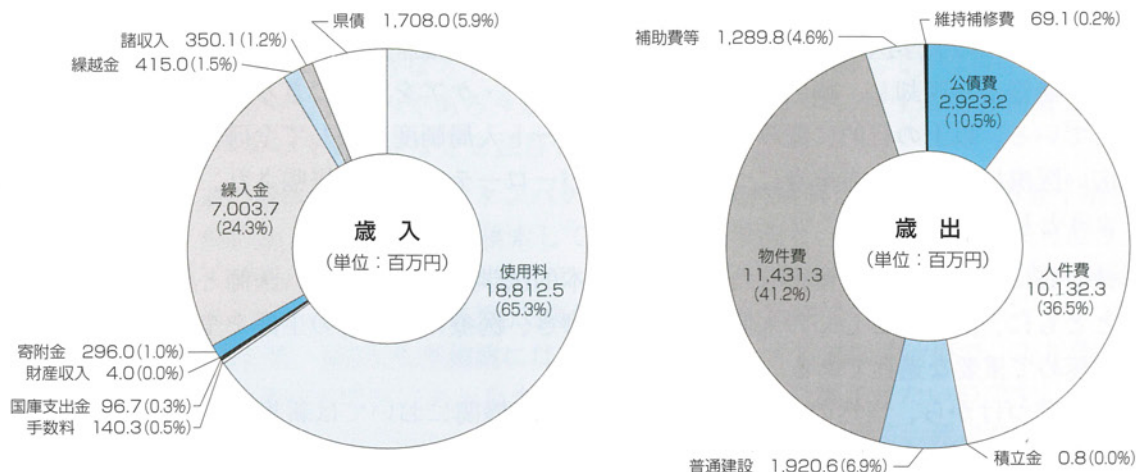
セクハラとは、「相手の意に反する性的な言動をいい、それに対する相手の対応によって相手が仕事を遂行するうえで、一定の不利益を与えたり、または相手の職場環境を悪化させること」をいいます。

セクハラのポイントは、**相手が不快に感じるかどうか**です。これくらいならいいだろうといった感覚で、知らない間にセクハラを行っていないかどうか、この機会に考えて下さい。

平成13年度 奈良県立医科大学費特別会計決算

平成13年度予算の執行にあたり、歳入については病院使用料等の特定財源の確保、並びに、歳出については経費の節減合理化等効率的な執行に努めていただいた結果、以下のとおりとなりました。

歳入決算額	288億26百万円	(対前年度 13億25百万円、 4.8%の増)
歳出決算額	277億67百万円	(対前年度 6億81百万円、 2.5%の増)
収支差引額	10億59百万円	(対前年度 6億44百万円、 155.2%の増)



平成13年度における経営改善の進捗状況

平成12年10月に策定した計画に沿って進めてきました経営改善の取り組みも、みなさんのご努力により、13年度は順調に進めることができました。

システム面では、MEセンターの稼働（13年6月）、注射薬ピッキングシステムの稼働（同6月）をはじめ、13年度中から準備を進めていた診療材料の一部を中央在庫化し、病棟等へ週1回の払い出しを行うシステムについても14年6月から運用しています。

さらに、患者サービスの向上を図るため、13年10月には診療科名を見直すとともに、病院ホームページを充実しています。また、病院ボランティアのみなさんの活動も来院される患者のみなさんに好評を得ており、今後は、業務内容の拡大も考えていきたいと思っています。

本年度には、診療報酬制度の改正があり、さらに来年からは、医療機関別包括評価制度の導入が決定しています。病院経営にとっては、よりいっそう厳しい時代をむかえていますが、引き続き改善に取り組んでいきたいと考えておりますので、みなさんのご協力をお願いします。

なお、主な経営改善項目の達成状況は、下表のとおりです。

項 目	12年度実績	13年度実績	目標数値			達成 状況
			13年度	14年度	最 終	
Ⅰ 収入の増加対策						
病床利用率の向上 入院患者数	91.7% (一般 93.9%) 291,212人 (一般 250,193人)	94.2% (一般 98.0%) 298,984人 (一般 261,015人)	94.0%	95.0%	95.0%	◎
平均在院日数の短縮	25.4日	27.0日	24.7日	24.0日	24.0日	×
外来患者数の増加	459,032人 (1,868人/日)	468,685人 (1,907人/日)	468,263人 (1,905人/日)	479,344人 (1,950人/日)	479,344人 (1,950人/日)	◎
Ⅱ 医薬材料費の削減						
薬 品 費	6,075,007千円	6,009,785千円	—	—	—	◎
薬 品 費 比 率	34.2%	32.6%	33.2%	32.4%	⑤32.0%	◎
診 療 材 料 費	2,164,480千円	2,161,850千円	—	—	—	◎
診療材料費比率	12.2%	11.8%	12.2%	12.1%	12.1%	◎

卒後臨床研修必須化への取り組み状況について——奈良県立医科大学附属病院における卒後臨床研修

1. 背景と目的

平成16年4月から、全ての新卒医師を対象に、将来どの様な分野に進むにしても、医学・医療の社会的ニーズを認識し、日常診療で頻繁に遭遇する疾患やその病態に適切に対応できるよう、幅広い基礎的診察能力（態度・技能・知識）を育成する卒後臨床研修の必須化が定められている。

このことは、旧来の大学医局講座に大きく依存してきた卒後臨床研修、すなわち疾病と臓器を診る専門医養成的な研修から脱却し、幅広い領域のプライマリー・ケアを実践できる医師の養成への大きな転換を意図している。以上の目的に鑑み、従来のストレート入局制度を廃して全研修医が必修科を中心に各科の幅広い医療技術と考え方を身につける「スーパーローテート」が提唱され、平成16年度から実施に移されようとしている。

初期卒後研修は、卒前教育で習得した包括的な基本的医学知識・手技を、医師として初期研修の場で実践するとともに、医療人としての人間性・感性を磨き、医療人としての生涯を全うする進路を見いだすためにも極めて重要な過程である。

非入局の義務づけから、当然のことながら2年間は医療機関においては新規人員の補充が困難な状況となる。しかし、2年後には幅広い基本的臨床技能を習得し、目的の定まった探求心の旺盛な医師を受け入れ、将来の専門医として、また実地医家として大きく育成することは医療機関・指導医にとって負担を補って余りある大きな喜びと資源をもたらすと考えられる。

このような趨勢の中で奈良県立医科大学附属病院ならびに関連施設における医療の充実を考えると、その目的に叶い、かつ実状を見据えた研修体制と互換性のあるカリキュラムの作成が必要となる。奈良県立医科大学附属病院卒後臨床研修委員会はこの目的に従い、研修体制の構築と基本研修カリキュラムを確立することは重要と考え、医学研修センターの設立を強く求めるとともに、関連施設における研修体制の整備、互換性のある共通研修プログラムと研修評価などを中心に、卒後臨床研修カリキュラムの在り方について検討を重ねてきた。

2. 平成15年度卒後臨床研修の基本骨格

平成15年度の卒後臨床研修カリキュラムの特徴として、幅広い人材を受け入れ、専門医教育から幅広い領域のプライマリー・ケアを実践できる医師を養成することを目標とし、以下の3項目を重点課題とした。

- 1) **内科研修の充実** ⇒ プライマリー・ケアにおいては、診療の基礎として内科の充実が求められており、学際を越えた内科研修が必要と考えられることから、内科研修は5内科が協力して統合型の研修を行うとともに、希望者には初期研修において充実した内科研修を受けられるよう整備すること。
- 2) **多彩な研修プログラム** ⇒ スーパーローテートが平成16年度から実施されることから、いち早くこの制度を受けたいと考える医学生がいる一方で、6年間の卒前教育を通じて、卒業時にすでに将来どの分野を専攻するか目的の定まっている医学生も少なくなく、これらの状況を鑑みると、研修ローテートにも特色のあるコースを作成し、施設と研修医の両者が受け入れられる臨床研修コースを設定すること。
- 3) **外部施設の活用** ⇒ 必須研修科とされる科目や一部の選択科においては、指導医数や症例数など種々の理由から、十分な教育効果が期待できない状況が想定される。このような科においては、その科の責任において研修指定外の外部医療機関において研修を受けることが出来るよう配慮すること。

卒後臨床研修委員会は、平成15年度の臨床研修と16年度以降の臨床研修は、法的にも、また待遇などにおいても根本的に異なることを認識するとともに、厚生労働省の通達、施設や処遇などの実施要

項に関する答申の遅れ、他大学の実状調査などに加えて、全診療科からの聞き取り調査結果を基に、全員非入局型の臨床研修は平成16年度から実施し、15年度はローテート教育の準備期間として位置づけ、入局に関しても柔軟に対応できるよう、以下の卒後臨床研修の3コースを設定した。

① 非入局ローテートコース

非入局ローテートカリキュラムは、平成16年度から予定されている「奈良県立医科大学卒後研修プログラム」に準じて、奈良県立医科大学附属病院で2年間の研修を行う。

- ☆ 研修科は、内科、外科、救命救急科、小児科を必須とし、その他の診療科・中央部門を選択する。
- ☆ 内科に関しては、内科系5科において、複数の内科をローテーションする研修プログラムを用意する。
- ☆ 非入局コースを選択する研修医の所属は、病院長直轄とする。
- ☆ 研修効果を向上させるため、このコースの定員は5～10名（予定）とする。
- ☆ 希望者は、吉岡教授（病院長）、平尾教授（卒後臨床研修委員長）、または中村教授（総合診療科）に相談する。

② 入局後に他科研修を選択するコース

入局型卒後臨床研修は、原則として、奈良県立医科大学附属病院で2年間の研修を行う。

- ☆ 入局後、他科の研修を希望するものは、あらかじめ、選択する関連領域などについて、入局志望科の教授とよく相談の上、研修科を選択する。
- ☆ 他科研修の内容は当該研修科の他科研修医用のカリキュラムに準じ、研修期間・時期については、入局科教授と研修受入科教授が相談し、決定する。
- ☆ 内科入局者に関しては、内科系5科において、複数の内科をローテーションする研修プログラムを用意する。

③ 従来型入局で専門領域を専修するコース

従来型入局で、専門領域の専修を行うコースで、入局希望科の卒後研修プログラムに従い、研修を行う。

（文責：奈良県立医科大学附属病院卒後臨床研修委員会 委員長 平尾佳彦）



一水会常任委員の「辰巳文一」氏より病院ギャラリーに絵画の寄贈がありました。

この作品『ヴォークリュースの川辺』は、フランスへのスケッチ旅行に行かれた時に描かれたもので、第63回一水会展にも出品されています。

B棟2階の病院ギャラリーに展示していますので、ぜひご覧下さい。

辰巳文一画伯とその作品
「ヴォークリュースの川辺」

一日看護学習体験実施

看護に関心をもつ高校生を対象として、8月1日（木）に「1日看護学習体験」を実施しました。この催しは、毎年、奈良県医務課が主催するもので、今年で11回目となります。今年度は、奈良県下の高校生約300名が県下4箇所の病院に分かれて参加しました。当奈良県立医科大学においても、87名の高校生を迎え、附属病院看護部と看護短期大学部が協力して、実施しました。

午前中は、看護短期大学部成人看護学の玉田章教授から、「看護短大の概要」の説明があり、続いて奈良県立医科大学附属病院の森本智磨子看護部長から「看護する心の大切さについて」の講話がありました。午後からは、短期大学部の実習室で血圧測定の体験をしたり、附属病院で看護師が洗髪や検温をしている場面を見学したり、車椅子に乗車するなどの体験をしました。

その後、グループに分かれて交流会を持ち、看護短大教員・看護短大在学生・附属病院の臨床指導者も同席し、看護師の仕事や学生生活について不安や疑問を話し合いました。話し合った内容を全体会の中でグループごとに発表し、発表された内容には、「看護師さんが患者さんの髪を洗っている場面を見学して、動作の前に言葉をかけておられ、看護師さんの優しさや思いやりを感じることができました。」という感想や、「テレビでしかみたことのなかった、ナースステーションや薬剤の準備室などを実際に見学し、貴重な体験ができました。」などの感想が聞かれました。また、今回の体験を通して「看護師ってかっこいい」「看護師になりたい」「心ある看護を目指してがんばりたい」など、看護の道を志す決意を新たにしている高校生もいました。

参加した高校生は、すでに臨床の場で働いている看護師、一足早く本短期大学部に入学した学生、看護を教える本学教員との交流を深め、充実した一日を過ごした様子でした。



体位変換の見学



血圧測定の体験

学生募集要項

看護短期大学部（奈良県立医科大学看護短期大学部）

平成15年度入学者選抜実施要項概要

看護学科

◎ 推薦入学者選抜試験

- ① 募集人員／40名 ② 試験実施日／平成14年11月30日(土)
- ③ 出願期間／平成14年11月12日(火)～11月14日(木)

◎ 一般入学者選抜試験

- ① 募集人員／40名 ② 試験実施日／平成15年3月1日(土)
- ③ 出願期間／平成15年2月12日(水)～2月14日(金)

※ 平成16年度から医学部看護学科となるため、短期大学部としての最後の試験となります。

専攻科 助産学専攻

- ① 募集人員／15名 ② 試験実施日／平成15年1月25日(土)
- ③ 出願期間／平成15年1月9日(木)～1月10日(金)

平成14年度学術研究奨励会事業計画

学術研究奨励会の平成14年度事業計画等が評議会で次の通り承認されました。

1 学術研究【Ⅰ. 特別事業】

ハイレベルな学外からの情報知識を得ることにより本学の学術研究のレベルアップを図る目的で、国内外の著名な講師による講演を開催する。予定講演数 5件。

2 学術研究【Ⅱ. 中島佐一学術研究奨励賞】

15年1月初旬に募集予定ですので、多数の応募をお待ちしています。

3 国際交流推進事業

チェンマイ大学との交流や留学生への滞在経費の支援等。

4 教育研究事業

ワークショップ開催経費や共用試験研究関連経費等。

5 特別補助事業【Ⅰ. 公開講座等支援事業】

①教室等で実施する一般県民を対象とした公開講座等への支援。ただし、民間企業等が共催又は後援して行う公開講座は対象外とする。1教室30万円を上限に5件分

②大学主催で行う公開講座（年2回）への支援。

6 特別補助事業【Ⅱ. 社会貢献支援事業】

「社会貢献度の高い医療関係の公的団体」への支援。相手側からの要請に基づき、予算の範囲内で補助する。

平成14年度奈良県立医科大学学術研究奨励会予算（単位：千円）

収 入 の 部		支 出 の 部	
県支出金	549,873	学術研究費	1,090,188
学術研究奨励交付金	539,049	研究費	1,078,168
研究補助員補助金	10,824	特別事業費	546
諸収入	2,065	中島佐一奨励賞	650
利子収入（研究費・事務費・基金）	356	研究補助員補助金	10,824
中島賞基金利子収入	26	国際交流推進事業	5,000
雑入	1,683	事業費	5,000
繰越金	668,300	教育研究事業	2,000
前年度からの繰越金	668,300	事業費	2,000
繰入金	624	特別補助事業	3,300
基金積立金からの取崩	0	公開講座支援事業費	2,300
中島賞基金積立金からの取崩	624	社会貢献支援事業費	1,000
合 計	1,220,862	運営費	120,374
		事務費	120,374
		合 計	1,220,862

医学部入試情報

奈良県立医科大学

平成15年度入学選抜要項概要

- ① 学部・学科／医学部医学科
- ② 選 抜 方 式／分離・分割方式
- ③ 募 集 人 員／前期日程75名、後期日程20名
- ④ 試験実施日／前期日程試験 平成15年2月25・26日（火・水）
後期日程試験 平成15年3月12日（水）
- ⑤ 出 願 期 間／平成15年1月27日（月）～2月5日（水）（前期・後期日程共通）
- ⑥ そ の 他／学生募集要項は平成14年12月頃に発表予定です。
なお、選抜要項は学生課において配布、また本学公式ホームページの入試情報にも掲載しております。

教授会報告

○ 各種委員会委員の選任及び改選

〔6月11日付〕

組換えDNA実験安全委員会委員の改選

上野 聡 (神経内科学講座 教授)

〔7月9日付〕

予算委員会委員の改選

東野 義之 (解剖学第一講座 教授)

古家 仁 (麻酔科学講座 教授)

大園誠一郎 (泌尿器科学講座 助教授)

石谷 昭子 (法医学講座 講師)

○ 大学規程の改正

〔5月14日付承認〕

組換えDNA実験安全管理規程の一部改正

(改正内容)

国の組換えDNA実験指針の改訂に伴い、本学の同規程について所要の改正を行うもの

〔7月9日付承認〕

人権施策委員会 (旧同和対策委員会) 規程の一部改正

(改正内容)

地域改善対策特定事業に係る国の財政上の特別措置に関する法律が失効したこと、及び、差別意識の解消に向けた教育・啓発は広く人権全体の中での関わりで行うことが有効であることから、委員会の名称変更と同規程について所要の改正を行うもの

○ 教員の海外出張 (長期・新規) 及び在外研究員の決定

〔5月14日付承認〕

井田 裕己 (外科学第二講座 助手)

出張目的: 「頸椎椎間板変性における骨増殖因子発現の検討」

出張先: ドイツ ボン大学

出張期間: 5月30日から6月間

森川 将行 (精神医学講座 助手)

出張目的: 「アルツハイマー病遺伝子組換えマウスにおけるアミロイドβ蛋白沈着抑制メカニズムの研究」

出張先: アメリカ合衆国 ワシントン大学医学部

出張期間: 7月1日から1年間

〔6月11日付報告〕

上記2名について、本年度本学在外研究員に決定された

○ 外国人客員研究員の受け入れ

〔7月9日付報告〕

Jeon Youn Soo (大韓民国 Soonchunhyang University Hospital)

研究課題: 「体腔鏡下手術の修練と尿路性器腫瘍学の研鑽」

受入教室: 泌尿器科学

受入期間: 9月1日から6月間

平成14年度

学術研究助成決定

7月1日に平成14年度本学学術研究助成選考委員会が開催され、11件の申請の中から次の3件が選考されました。

内科学第二講座 助手 福岡 和也

「SAGE(Serial Analysis of Gene Expression)法を用いたヒト肺癌発現遺伝子プロファイルの作製と抗癌剤標的遺伝子発現の解析」

精神医学講座 助手 法山 良信

「精神発達期の海馬における興奮性シナプス伝達に対するドーパミンの作用」

中央臨床検査部 助手 村川 幸市

「AP-PCR法によるMRSA院内検出株に対する分子疫学的検討」

平成14年度

医師会学術奨励賞受賞者決定

7月3日に平成14年度奈良県医師会学術奨励賞の授与がありました。

これについては、本学の奈良県医師会学術奨励賞推薦委員会で、本学からの4名の応募の内、審査の上3名を推薦し決定を受けたもので、受賞者は次のとおりです。

内科学第一講座 助 手 川田 啓之

内科学第三講座 博士研究員 米田 諭

産婦人科学講座 助 手 寺西 明子

編 集 後 記

看護短大の四年制化、大学院改革、学部教育改革、病院運営改善など、この数年は本学にとっての節目となります。どのような改革も生みの苦しみを伴うことは否めません。この時期を乗り越え、本学の存在意義をより高めることが現職員の責務です。このような状況にあって本学報が皆様の情報共有に役立つことを願っております。

現在、本学報の愛称について4件の提案がありました。提案して下さった方々には心よりお礼申し上げます。しかしながら、当初予定より件数が少ないこともあり、募集期間をさらに延長したいと考えますので、よい愛称がありましたら編集委員までお知らせください。

編 集 委 員

- 山下 勝 幸 (生理学第一)
- 吉田 泰 彦 (英 語)
- 水野 文 子 (細菌学)
- 吉田 克 法 (透 析 部)
- 植 林 みどり (看護部)
- 上 田 恵 子 (母性看護学)
- 南 口 昌 克 (病院第一課)
- 柳 澤 美 穂 (学 生 課)
- 大 門 喜 信 (総 務 課)
- 田 中 章 介 (総 務 課)

(○印は委員長)